



アンネの日記

上原中学校 三年一組 櫻井 郁子

この本は、第二次世界大戦中、当時十五歳だったユダヤ人の少女アンネ・フランクが、ナチス・ドイツのユダヤ人迫害から逃れるため、七人のユダヤ人と共に過ごした約二年間に及ぶ逃亡生活を記した日記です。この本は世界的ベストセラーであり、日本でも社会科の教科書等によく取り上げられています。なので、一度は名前を聞いたことがある方も多いのではないのでしょうか。

私が初めてこの本の存在を知ったのは、小学校六年生のときでした。その当時は、「ああ、こんな本もあるんだな。」程度で、あまり興味・関心はありませんでした。七十年近く前の戦争の事なんて自分には関係ないと思っていたし、何より私は当時の歴史についてあまりよく知らなかったのです。

その考えが変わったのは、つい最近のことです。社会科の授業で、ナチス・ドイツのユダヤ人迫害と、アンネの日記について詳しく学習し、それがいかに残酷で悲しい歴史であるかを知りました。そしてその後、私はこの本を読みました。

この本を読む以前に、教科書に一部抜粋された部分を読んで大きな衝撃を受けたことを未だに覚えています。

「親愛なるキティーへ きょうは、悲しく憂鬱なニュースばかりです。たくさんのユダヤ人のお友達が、いっぺんに十人、十五人と検束されてい

きます。この人たちは、ゲシュタポからこれっぽちの人間らしい扱いも受けず、家畜を運ぶトラックに詰めこまれて、ドレンテにあるオランダ最大のユダヤ人収容所、ヴェステルボルクへ送られてゆきます。」

考えてみてください。自分の友達が、十人・十五人と拘束され、人間らしい扱いも受けず強制収容所へと連行されて行くのです。こんなに恐ろしいことが当時は日常的に行われ、アンネ達ユダヤ人は、日々いつ見つかかり捕まるか分からない恐怖におびえながら生活していたのです。他にも、当時の食糧事情・生活環境の悪さなど、ユダヤ人がいかに厳しい状況に置かれ、窮屈な生活を強いられていたかが読み取れる部分がたたくさんあります。

また、この本には、一人の十五歳の少女としての、恋愛や自分自身、対人関係についての悩みなどの心の葛藤や日々感じたことなどもたくさん書かれています。平和な現代社会に生きる私でさえ、日々色々な壁にぶつかり悩みの尽きないこの年頃で、その上非常に厳しい状況に置かれていた彼女には、想像以上の負担がかかっていたことがとても伝わってきます。

一九四四年八月四日、アンネたちの隠れ家はゲシュタポに見つかり、隠れ家の住人は全員強制収容所へ連行されてしまい、アンネは翌年の三月頃、十五年間の短い生涯をとじます。終戦後、日記はアンネたちをかくまっていた人により、隠れ家の住人の中で唯一生き残ったアンネの父に手渡されます。アンネの父は、この日記を通じて、彼女の遺した平和へのメッセージを後世に伝えていくために、その後の生涯を捧げま

す。この日記には、筆者であるアンネ自身、また彼女の父など、様々な人の平和への祈りが込められているのです。

私は、「アンネの日記」を、もつとたくさんと同年代の人達に読んでもらいたいと思います。今まで人間が犯してきた数々の過ちから構成されているといっても過言ではない、平和な現代社会に生きているからこそ、過去の過ちにしっかりと目を向け、もう一度「平和」とはなんだろうと考え、今自分が生きている平和な世の中は、たくさんの方の死や悲しみから成り立っていることを、改めて実感してほしいからです。また、自分たちと同じ年頃の一人の少女が遺した平和へのメッセージをこの日記から感じ取り、それを後世へ伝えていかなければならないということをおぼえてはいけないと思うからです。

今この瞬間も、地球上のどこかで紛争が起こり、誰かが犠牲になり、たくさんの方が恐怖におびえながら日々生活しています。そんな中、こうして毎日学校へ通い、十分な食事をとり、家族や友人と楽しく過ごす。こんなごく当たり前のようなことが「平和」であると、私はこの本を読んで思いました。人によって感じ方や考え方は違いますが、この本を読む前と後では何か違ったものが見えてくるのではないかと思います。

私は、一人の十五歳の少女が遺した平和へのメッセージがもつと多くの人々に届き、今までの過ちをもう繰り返すことのない、平和な世界が実現することを願います。